頭塔の調査

平城宮跡発掘調査部・美術工芸研究室

発掘調査（第114次） 本調査は奈良市高畑町の史跡頭塔に東接する奈良法務局跡地への県立老人福祉センター建設に伴なう事前調査であり，史跡内の一部をも併せて調査した。

頭塔は高さ10m，一辺30～35mほどの方形の土壇が残っており，13基の石仏が露出している。東面第一段中央石仏の周辺を主として調査し，石仏前面を南北にはしる壁体石組みと基壇東端を検出すると共に，中央石仏の北5.3mの位置で新たに石仏一基を確認した。

壁体石組みは石仏の手前50cmの位置に東面を揃えて自然石を垂直に積み上げている。遺存度のよい所で高さ80cmを測る。この壁体の東4mの位置では基壇東端の石組みを検出した。やはり自然石を垂直に積み上げており，高さ約70cmが残っている。基壇の外周には人頭大から拳大までの自然石を敷き詰めており，基壇端から1m幅まで確認したが，当初の広がりは不明である。基壇の築成は地山の高低に応じて盛土・削平を行なっている。盛土は粗い互層状をなし，頭塔全体が盛土によって築かれたとみられる。

なお基壇東方では幅約6mの南北溝を検出した。基壇東端から溝の西肩までは約4m隔てている。堆積土に含まれる瓦類・土器類からみて平安後期の廃絶とみられる。基壇東北方に設定したトレンチではこの溝は検出されず，基壇から等距離で巡るものではないことは判明したが，これが頭塔と関連した施設である可能性は残る。

新たに確認した石仏は，縦70cm以上，最大幅76cm，厚さ約10cmの花崗岩立石の表面に仏像を浮彫にし，線刻風の輪郭を施す（次頁参照）。

発掘結果を，当研究所がかつて行なった地形測量の成果（「年報」1961）と照らし頭塔の規模を復原すると，基壇は一辺32mの正方形で高さは約1.2mとなる。第一段壁体は一辺24mとなり，各辺の4等分点に仏龕が配されたことになる。南北の主軸線はほぼ真南北であり，主軸線が東大寺大仏殿の中心に向かうとの従来の見解を改めることとなった。頭塔の性格はなお明らかではないが，出土した奈良時代の軒瓦35点はすべて東大寺式であることから，東大寺に密接な関連を有する施設とみられる。（清水　真一）

第114次調査位置図

石仏の調査　頭塔は東大寺大仏殿の南方約1.3kmに位置する四角錐台の土塔である。現在は封土のくずれや生い茂る樹木によって，当初の姿がやや変っているが，四段に構築されていて，四方の各面に計13基の石仏が残っている（他に１基が郡山城の石垣に転用されている）。各石仏は第二段北面中央（10号像）の１基が粘板岩である他，すべて花崗岩製で，それぞれの一面に如来浄土や仏伝などが浮彫されている。第一段東面北寄で新たに１基（第14号像）が今回の発掘調査で確認されたのでこの石仏の概要を報告する。

第一段の各面の中央には如来坐像を中心に，左右に菩薩像が随侍する図様の大形の石仏が配置され，南面の西寄りには仏伝中の苦行像（２号像），西面の南寄りには同じく成道像（３号像），同北寄りには涅槃像（５号像）などやや小形の石仏が置かれている。今回確認された14号像は風化のため彫刻面が磨損して細部は明らかでないが，『維摩詰所説経』巻五文殊師利問疾品の光景をあらわしたことがわかる。釈尊が毘耶離城の菴羅樹園にあって城中の長者維摩詰が病床にあることを知り，仏弟子を見舞に行かせようとしたが，十大弟子，諸菩薩とも維摩詰に難詰されることをおそれて病を問う者がなく，やむなく文殊師利菩薩が問疾することとなり，「文殊，維摩詰が談ぜば必ず妙法を説かん」と多くの菩薩，声聞，天人が文殊に随って入城した。

本図は将に文殊と維摩詰が相対した場面である。不整形のやや縦長の花崗岩の平坦な一面に，輪郭を線刻風にして肉薄に図様を浮彫する。上半部は当初図様が存在したか否か不明で，現状では下半部に５人の人物の存在が確認される。向ってやや右寄りに文殊と維摩詰が左右に相対し，文殊の背後には三軀の菩薩が随っている。維摩詰は輪郭をとどめる程度で，斜め内側を向き，首を傾け，左手で団扇を執って方座上に袖や裾を垂らして坐り，文殊はこれと対称に位置するが，体軀はほとんど形をとどめず，二重円相光を背にし，仰蓮と反花からなる蓮花座上に坐る形が確認され，背後には二軀とその左下に一軀の合掌する菩薩を文殊とほぼ同形，同大に配している。

第114次発掘遺構図

なお文殊の蓮華座の下には宝相華風の植物が刻まれている。

石仏の配置については，第一段に12，第二段に8，第三，四段に各4の計28基（あるいはそれ以上）があったと推定される。第一段の四方の如来浄土の左右に配置されている小形の石仏は，残存する3基がいずれも仏伝をあらわしているところから，確認されていない他の5基と合せ釈迦八相が配置されていたと考えられていたが，今回の発見で仏伝以外の経典からも取材していることが明らかになり注目された。頭塔という名称は僧玄昉の首塚とする伝説によっているが，『東大寺別当次第』に「神護景雲元年實忠和尚依僧正命御寺朱雀之末作土塔」，『東大寺要録』（実忠29ケ條事）に「一，奉造立塔一基，在新薬師寺西野，以去景雲元年所造進也」と記載される塔に当ると考えられ，東大寺大仏と関連して制作された誕生仏や八角燈籠の音声菩薩と頭塔の石仏とが様式上きわめて近く，大仏建立後の768年に実忠によって制作されたという記事が首肯される。

頭塔が如何なる目的で造立されたかは記録等には一切記載されていないが，ここで注目されるのは各石仏の配置，土塔の形である。上代の塔婆の四面には元興寺，興福寺（各現存せず），西大寺などのように四方四仏を安置する例と薬師寺（釈迦八相），法隆寺（維摩詰・涅槃・分舎利・弥勒浄土）など仏伝や経典の場面をあらわすものの二種があり，頭塔の場合は第1段にこの両者が備わっている。しかし，塔の形は一般の三重塔や五重塔など木造建造物とは異り，むしろ原初的な仏塔と見るべきであろう。しかも，各段に仏伝などを混えた石仏を荘厳するところなどはインドにおけるストゥーパのメダイヨンが想起される。（田中　義恭）

石仏一覧表

基壇東端石組と中央石仏龕

東面第一段壁体と石仏龕